

あいち病害虫情報 最新情報

令和5年4月17日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

ムギ類の病気（赤かび病、うどんこ病）

ムギ類赤かび病は、開花期から乳熟期に降雨が多く、気温が比較的高い（20～27℃）と急激に感染が拡大します。名古屋地方気象台4月13日発表の1か月予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並みか多い見込みです。また、近年同病の発生量が多く、本病の一次伝染源（越冬菌量）が多くなっていると予想され、今後の発生拡大が心配されます。春先の気温が高く例年に比べてムギの生育が早いため、本日発表の「令和5年度ムギ類赤かび病情報第2号」を参考に、確実に適期防除を実施しましょう。

ムギ類うどんこ病は、春が温暖で雨が多く、ムギが早くからよく繁茂した年に多く発生します。今年は3月下旬に本病の初発を確認しており、例年に比べ初発が早いです。今後、発生が拡大する恐れがありますので、ほ場の発生状況を注意し、発生を確認したほ場では防除を行いましょ。

水稻の育苗期防除

普通期栽培のは種作業が始まります。次の1～6に注意して適正な種子消毒に努めましょ。

- 1 細菌性病害にも効果のあるテクリードCフロアブルなどを用いて、種子消毒を行いましょ。浸漬処理法の場合、薬液温度は極端な低温にならないようにしましょ。また、処理濃度と時間を守りましょ。種子消毒後の廃液は、適切に処理しましょ。浸漬処理後の廃液処理が困難な場合には、種子粉衣（湿粉衣法）や塗沫法などの使用方法に切り替えるか、微生物農薬や温湯種子消毒を利用しましょ。
- 2 エコホープDJなどの微生物農薬を利用する場合、薬液の温度が10℃以下、30℃以上では効果が劣るので、処理温度に注意しましょ。
- 3 温湯種子消毒の場合、適切な処理温度、時間（例：60℃、10分）を守りましょ。
- 4 種子消毒後は病原菌の汚染がないよう管理しましょ。
- 5 催芽温度は30～32℃を守りましょ。
- 6 高温での浸種や長時間催芽は細菌感染を助長するので避けましょ。

落葉果樹の病害虫

ナシ黒星病について、4月上旬の巡回調査では花そう基部での発生量は平年並でした。しかし、名古屋地方気象台4月13日発表の1か月予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か多い見込みであるため、今後降雨に伴い発生量が増えるおそれがあります。ほ場での発生状況に十分注意してください。また、ナシ赤星病の感染時期を迎えていますので、黒星病とともに防除しましょ。

モモを加害するクワシロカイガラムシの防除適期は、1齢幼虫の発生ピーク時です。本日発表の「モモのカイガラムシ類情報第1号」を参考に、適期に防除しましょ。

果樹カメムシ類の飛来はやや少ない

果樹カメムシ（チャバネアオカメムシ）の6月末までの飛来数は、越冬成虫量からおおよそ予測できます。今年のカメムシの越冬成虫量はやや少ない状況です。越冬成虫量に関する詳細は、4月4日発表の「果樹カメムシ類情報第1号」を参照してください。

果樹カメムシは夜温が上昇すると、活動が活発になります。今後の園内への飛来状況に注意しましょう。

ナシヒメシクイの発生に注意！

フェロモントラップによるナシヒメシクイ越冬世代の成虫誘殺ピークの時期が平年と比べてやや早い地域があります。また、誘殺数は平年と比べて多い地域があります。詳細は、本日発表の「ナシヒメシクイ情報第1号（モモ）」を参照してください。

果菜類の病害虫

ナスすすかび病の発生が目立つほ場があります。同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション防除を心がけましょう。

ウイルス媒介虫を施設外に出さないようにしましょう！

トマト黄化葉巻病やトマト黄化病、キュウリ黄化えそ病の防除対策の基本は、ウイルス媒介虫を「施設内に入れない」、「施設内で増やさない」、「施設外に出さない」の3つです。収穫期間中はウイルス媒介虫であるタバココナジラミ（トマト黄化葉巻病、トマト黄化病）やオンシツコナジラミ（トマト黄化病）、ミナミキイロアザミウマ（キュウリ黄化えそ病）の防除を徹底しましょう。なお、次作の感染源を減らすため、収穫終了後は残さを持ち出す前に施設を密閉して、ウイルス媒介虫を死滅させましょう。

フェロモントラップなどの各種調査データは、HP「あいち病害虫情報」（アドレス：<https://www.pref.aichi.jp/site/byogaichu/index.html>）を参照してください。

問合せ先 愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病害虫防除室
TEL 0561-62-0085 内線471 FAX 0561-63-7820